

平成 21 年 6 月 1 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720142
 研究課題名（和文） 医療関係者・医療系大学生に必要なリーディング・リテラシー伸長に関する調査・研究
 研究課題名（英文） A Study on the Improvement of Reading Literacy among Medical Students and Medical Professionals
 研究代表者
 三原祥子（MIHARA NAKAKO）
 東京女子医科大学・医学部・講師
 研究者番号：00343559

研究成果の概要：コミュニケーション教育、日本語教育の専門知識をベースに、インストラクショナル・デザイン、医療人文学、医学教育準備教育、ピア・レスポンスの知見を踏まえた調査・研究がなされた。そして、その成果を反映し、医療系大学（医学部、看護学部）初年次生を対象としたカリキュラムおよびシラバスが作成され、学会においてその成果・今後の課題が公開された。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	270,000	2,970,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：リーディング・リテラシー、医療系大学生、コミュニケーション教育、コミュニケーション力、表現技術、読む、書く、ピア・レスポンス

1. 研究開始当初の背景

リーディング・リテラシー育成への全世界的ニーズの高まり、および、科学研究費補助金研究若手(B)課題番号:14780163 平成 14 年～16 年度研究課題：「医療系大学生の思考力・表現力涵養のための調査・研究」の研究成果に鑑み本研究課題に取り組み始めた。

・「リーディング・リテラシー」の定義：「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書

かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」つまり、単なる読解に止まらず、書いてあることを根拠にして自分の意見を表明するなど、「読む・書く・聞く・話す」が一体となったものである。（有本秀文、「PISA 調査でなぜ日本の高校生の読解力は低いのか？」、『日本語学第 24 巻第 7 号 6 月号』、pp.6-14.2005）

・「コミュニケーション教育」の定義：「言語を効率的に習得・獲得させるということが主たる目的でなく、人間同士が関わり合うこと

の意義や困難さなどに気づき、言語と非言語を的確に理解・運用して他者や社会との関係性を創り・保ち・修正する力を養成することを主な目的とした教育」(伊東祐郎・松本茂、「日本語教師の実践的知識・能力」、『講座・日本語教育学第4巻言語学習の支援』、スリーエーネットワーク、pp.2-24.2005)

(1)社会の要請

PISA 調査の結果が問題視されている中、医療系大学生・医療関係者にとって重要なリーディング・リテラシーにまつわる問題を今日の問題として捉え、それが高等教育においてどのような影響を与えているかを検証することを目指した。また、大学レベルでの母語(日本語)のリーディング・リテラシーの研究が少ないという点にも着目した。特に、医療系の大学での研究は皆無であるという点も特筆に価すると考えた。

(2)申請者本人の先行研究の活用

これまでの研究では、リーディング・リテラシー構成要素である書く能力および思考力について主に調査研究を重ねてきた。書くことの指導にあたり、医療関係の論文、医学・看護学の専門教育におけるレポート、読書レポート、病院内での配布資料・掲示物、ホームページ、電子メール、手紙、(教材として作成された)診療録・看護記録、などを分析的に読み、より読み手にとって分かりやすく配慮ある書き方について学生に検討させてきたため、読む学習が学生に与える意義と成果についてのデータがすでにあった。

また、書くことの指導の際に、ピア・レスポンスという相互推敲活動を取り入れていたため、学生の読む過程にも注目してきた。

今回の科研では、これまでの研究と蓄積したデータを踏まえ、読むというコミュニケーション行為に焦点を当て、研究を深めていくことを目指した。

2.研究の目的

本研究では、社会的に要請されているよりよい医療機関利用者・医療関係者の関係の構築に寄与することを目指した。

医療系大学生および医療従事者のリーディング・リテラシーをコミュニケーション教育の立場から伸長することを通し、医療系大学生および医療従事者の生涯学習・自己成長の基盤となるコミュニケーションの基礎的能力を涵養することを目的とした。

そのために、医療系大学生および医療従事者に要請されるリーディング・リテラシーについて現状および研究成果を分析し、その結果をもとに医療系大学生(主に初年次学生)のリーディング・リ

テラシー涵養のためのカリキュラム、シラバス、教育方略、評価法について、さまざまな専門家と協働し、調査研究を行い、成果を公開した。

3.研究の方法

主な方法は、文献調査、授業分析、アンケート調査、インタビュー調査、専門家(コミュニケーション研究者・インストラクショナル・デザイナー、医療人文学者、図書館司書、リーディング・リテラシーを駆使している患者会の会員等)からの知識の提供である。

本研究では、ノンメディカルの視点を最大限に活かすことを目指した。なぜならば、医療関係者および医療系大学生がいつの間にか失いがちである医療機関利用者の視点を最大限に活かすことは、患者中心医療に寄与するところが大きいと考えたためである。このため、主な専門知識の提供者は、医療関係者および医療系大学生との関わりを持つノンメディカルの方々となった。

しかし、最終的には、デザインしたカリキュラムが医療系大学生を対象とした教育で活用されることを目指しているため、医療者で医療系大学生の教育に関わっている教育者・研究者の見解も尊重し、ノンメディカルと医療関係者の共存の姿をイメージし、研究を行った。

4.研究成果

医療系大学生初年次生を主たる対象としたリーディング・リテラシー伸長のためのカリキュラム、シラバスのデザイン、実施、再デザインをし、成果を学会で発表した。

平成18年度研究成果

(1)リーディング・リテラシーに関連する国内外の論文、文献、教科書、HP等の情報検索・収集、入力

(2)専門家(インストラクショナル・デザイナー)との共同作業による、医療系単科大学(医学部および看護学部)の初年次教育における表現技術系科目(必修科目、選択科目)のシラバスおよびカリキュラムの分析、設計

(3)(2)の結果のリーディング・リテラシーに注目した分析

(4)上記大学初年次教育における人間性の涵養を目指した読書課題の、コールバーグの道徳段階説に依拠した構造的枠組みを導入しての再デザイン

(5)教育内容分析のための、教員が学生のリーディング・リテラシーに対して抱いているイメージをあぶりだすためのアンケートおよびインタビューのデザイン

(1)は、大学入学以前の教育内容も視野に

入れてはいるが、大学教育以降のもので成人を対象としたものを中心に行った。

(2)から(5)の調査・研究は、分析、設計、開発、実施、評価技法の確立しているインストラクショナル・デザインを導入した。このことにより、より効果的・効率的な教育デザインとなった。上級学年も考慮しているが、平成 18 年度は初年次学生を中心に行った。

(2)および(3)の調査・研究は、医療関係者および医療系大学生のニーズおよび対象となった医療系大学のカリキュラムの流れを考慮し行われたものである。成果の一部は、学会にて発表した。

平成 19 年度研究成果

平成 18 年度の成果を踏まえたうえで、以下の(1)から(5)の調査・研究を行った。

(1)リーディング・リテラシーに関連する国内外の論文、文献、教科書、HP 等の更なる情報検索・収集、入力

(2)専門家(コミュニケーション教育研究者)との共同作業による、医療系単科大学(医学部)の初年次教育における表現技術系科目(必修科目)のシラバスおよびカリキュラムの再デザイン

(3)の結果のリーディング・リテラシーに注目した分析および成果の発表

(4)専門家(図書館司書、リーディング・リテラシーを駆使している患者会の会員)との共同作業による医療系大学生を対象とした読書課題のデザイン

(1)の情報収集は、主対象は成人だが、読書体験およびリーディング・リテラシーのレベルが異なる学生に対応できるよう、初中等教育におけるリーディング・リテラシー関連科目・活動に関する文献・情報の収集も行った。平成 19 年度は「図書館の活用力の向上」および「人間性の涵養」につながる本および情報の収集にも力を注いだ。その際に、公共図書館、医学図書館、病院図書館、患者図書館の現状に精通している専門家および医療者に期待するコミュニケーション力・リテラシーについて実体験をもって深く理解している患者会会員による情報提供が非常に役立った。

(2)(3)の調査・研究は、医療系大学生の置かれている状況、医療系大学生への社会の期待などを考慮したカリキュラム・デザインを目標に行われた。成果の一部を学会で口頭発表し、認知心理学の観点からの課題の負荷に関する有益なフィードバックを得ることができた。

平成 20 年度研究成果

平成 20 年度は、平成 19 年度の研究成果の実施、評価、再デザイン、および成果の発表を中心に行った。教育・研究上交流のある専

門家(コミュニケーション教育研究者、医療系大学準備教育担当者(医療者、非医療者の両方を含む)教育方略の専門家(特に、協働学習の研究者)、インストラクショナル・デザイナー、医療人文学研究者、いのちの教育研究者)の協力を得、調査研究をさらに充実させた。

(1)平成 19 年度までに収集したリーディング・リテラシーに関連する国内外の論文、文献、教科書、HP 等の情報の分析結果のさらなる洗練

(2)平成 18 年度の成果を踏まえ、平成 19 年度に専門家(コミュニケーション教育研究者)との共同作業によりデザインした医療系単科大学(医学部)の初年次教育における表現技術系科目(必修科目)のシラバスおよびカリキュラムの実施、評価、成果の発表

(3)平成 18 年度に再デザインし平成 19 年度に実施した上記大学初年次教育における人間性の涵養を目指した読書課題の再デザイン、実施、評価

(4)医療人文学専門家、いのちの教育の専門家等、医療系において意義深いコンテンツの専門家による情報提供・意見交換をもとにしたカリキュラム案の作成

(5)教育内容分析を目的とした、教員(先輩、上司)が学生(後輩、部下)のリーディング・リテラシーに対して抱いているイメージをあぶりだすためのアンケートおよびインタビューの実施、評価

今後の課題は、以下の通りである。

(1)学生の追跡調査をし、教育内容、方法の再検討をし、授業デザインに反映させていくことである。医療系大学生の場合、本当の教育の成果は、医療者として現場に出たときに評価できるからである。

(2)「医療系大学生に期待される読み方」「プロフェッショナルとして求められる人間性・個性を把握するための読解課題」に関する調査を行いたい。マッチングや奨学金申請の際の作文課題では、自由に意見を述べるだけではなく、資料や文献を読んだ上での作文が求められることがある。主な評価者は、医療の専門家である。これらの専門家が良しとし期待する読み方は、医療系大学生のリーディング・リテラシーに大きな影響を及ぼすと予測される。このテーマは、本研究期間の後半に注目したものであり、成果としてまとめられていない。コミュニケーション教育専門家、日本語教育専門家等ノンメディカルが期待・予想する医療系大学生のリーディング・リテラシー像との違いを明らかにし、本研究の再吟味をしていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

三原祥子(2009)「医学系学部におけるコミュニケーション教育はどうあるべきか」、*Speech Communication Education* Vol.22、2009 37-46 日本コミュニケーション学会、査読無(招待論文)

〔学会発表〕(計6件)

三原祥子・松本茂、「医学部初年次教育における文章表現教育の改革の試み」、第15回大学教育研究フォーラム、2009年3月21日、京都

中村千賀子・星野晋・三原祥子・沖田一彦、ワークショップ「準備教育で忘れてはならないもの」、第40回日本医学教育学会大会、2008年7月26日、東京

松本茂・吉武正樹・五十嵐紀子・三原祥子、コミュニケーション教育研究会パネル「大学におけるコミュニケーション教育はどうあるべきか」、日本コミュニケーション学会第38回年次大会、2008年7月6日、愛知

三原祥子・松本茂、「文章表現教育へのリーディング・リテラシーの導入 医学部初年次教育における改革案」、第14回大学教育研究フォーラム、2008年3月21日、京都

三原祥子・君島浩、「人間性の向上を目指した読書レポート課題の再デザイン」、第39回日本医学教育学会大会、2007年7月27-28日、岩手

三原祥子・君島浩、「教育方略および言語学の観点からの医療系大学表現技術系科目の改善案」、大学教育学会第29回大会、2007年6月10日、東京

〔図書〕(計1件)

大島弥生・大場理恵子・岩田夏穂 編『大学の授業をデザインする 日本語表現能力を育む授業のアイデア』、ひつじ書房、261(68-81) 三原祥子「看護学部の表現技術教育でピア活動を行う」、2009年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三原 祥子(MIHARA NAKAKO)
東京女子医科大学・医学部・講師
研究者番号: 00343559

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし